キリスト者のための弁明

アテナゴラス
藤遥　制作

宛名、1〜3章　名だけで憎まれるキリスト者と、三つの訴え

0:1 皇帝たち、マルクス・アウレリウス・アントニヌスとルキウス・アウレリウス・コンモドゥスへ。アルメニアの征服者[1]、サルマティアの征服者であり、何よりも哲学者であるあなたがたへ。

1:1 偉大な皇帝たちよ、あなたがたの世界では、人々がそれぞれ違う慣わしと法を用いています。そして、そのだれも、法や裁きへの恐れによって、先祖から受け継いだものを愛することを妨げられてはいません。たとえ、それがこっけいなものであってもです。かえって、トロイアの人はヘクトルを神と呼び、ヘレネをアドラステイアだと信じて拝みます。ラケダイモン人は、アガメムノンをゼウスとして、またテュンダレオスの娘フィロノエをあがめます。テネドスの人はテンネスをあがめます。アテネの人は、エレクテウスに、ポセイドンとして犠牲をささげます。また、アテネの人々は、アグラウロスとパンドロソスのために儀式と秘儀を行います。この二人は、箱を開けて、神を敬わないことをしたとみなされた者たちです。一言で言えば、人々は民族ごと、土地ごとに、望むままの犠牲と秘儀を行っています。エジプト人は、猫も、わにも、蛇も、毒蛇も、犬も神々とみなしています。1:2 そして、あなたがたも法も、これらすべてを許しています。神をまったく認めないことは、神を敬わず神聖を汚すことだと考えているからです。そして、人がそれぞれ望むものを神々として用いることは、必要だと考えているからです。神へのおそれによって、人々が不義を行わないようにするためです。それなのに、なぜ、あなたがたには名が憎いのですか。多くの人々のように、聞き伝えに惑わされないでください。名というものが憎しみに値するのではなく、不義の行いが裁きと刑罰に値するのだからです。1:3 そのため、人々は、あなたがたの穏やかさとやさしさ、だれに対しても平和を好み、人を愛する心に感嘆しています。一人ひとりは法の前で等しく扱われ、町々はその値打ちに応じて等しい誉れにあずかっています。全世界は、あなたがたの賢明さによって、深い平和を楽しんでいます。1:4 しかし、キリスト者と呼ばれるわたしたちのことには、あなたがたは同じように心を配っていません。わたしたちは、何の不義も行っていません。そればかりか、論が進むにつれて示すように、神とあなたがたの統治に、だれよりも敬虔に、正しく向き合っています。それなのに、あなたがたは、わたしたちが追われ、奪われ、迫害されるのを許しています。多くの人々が、ただ名のためだけに、わたしたちに戦いを挑んでいるのです。そこで、わたしたちは思い切って、自分たちのありのままを明らかにすることにしました。わたしたちが、正しい裁きもなく、どんな法にも理にも反して苦しめられていることを、あなたがたはこの論から知るでしょう。そして、わたしたちのことも少し考えてくださるよう、お願いします。偽りの訴えをする者たちに殺されることが、いつかやむようにするためです。1:5 実際、迫害する者たちから受ける損害は、財産のことではありません。恥も、市民の権利を失うことではなく、害も、ほかの何か重いもののことではありません。わたしたちは、多くの人々には大事に見えるこれらのものを、軽んじているからです。わたしたちは、打つ者を打ち返さないこと、わたしたちを引いて行き奪う者たちを訴えないことだけでなく、こう学んできました。こめかみを打ってはずかしめる者には、頭のもう片方をも打たせ、下着を取る者には、上着をも与えることです（マタイ五・三九〜四〇、ルカ六・二九）。かえって、わたしたちが財産を手放すと、彼らは、わたしたちのからだといのちをねらって企み、山のような罪状を浴びせかけます。それらの罪は、わたしたちには思いの中でさえ当てはまりません。むしろ、むだ口をたたく者たちとその仲間にこそ当てはまるものです。

2:6 わたしたちが小さなことでも大きなことでも不義を行っていると、だれかが証明できるとします。それなら、わたしたちは罰を受けることを拒みません。それどころか、どんなに厳しく容赦のない刑罰でも受けるのが当然だと考えます。しかし、少なくとも今日まで、わたしたちについての作り話は、世間の人々の分別のないうわさにすぎません。不義を行ったと証明されたキリスト者は、一人も

いないのです。もし訴えが名だけにとどまるなら、わたしたちへの不当な扱いを法によって取り除くことは、もはやあなたがたの務めです。いとも偉大で、人を愛し、学びを何よりも愛する皇帝である、あなたがたの務めです。全世界は、一人ひとりも町々も、あなたがたの施す恵みにあずかってきました。わたしたちも、偽りの訴えを受けることがやんだのを誇りとして、同じようにあなたがたに感謝できるようにするためです。2:7 実際、次のことは、あなたがたの正義にふさわしくありません。ほかの人々は、不義の行いで訴えられても、罪が証明されるまでは罰せられません。それなのに、わたしたちの場合には、裁判での証明よりも、名のほうが重く扱われるのです。裁く者たちは、裁かれる者が何か不義を行ったかを問うのではなく、名を不義の行いであるかのように侮辱しています。2:8 名は、それ自体として、悪いとも善いとも考えられるものではありません。名の下にある行いが悪いか良いかによって、名はつまらないものにも良いものにも見えるのです。あなたがたは、哲学とあらゆる教養を身につけた人として、このことをだれよりもはっきりと知っています。それゆえ、あなたがたの前で裁かれる者たちは、最も重い罪で訴えられていても、安心しています。あなたがたが彼らの生き方を調べることを、知っているからです。名がむなしければ名にくみせず、訴えから出た罪状が偽りなら、それにもくみしないことも知っています。彼らは、有罪の票も無罪の票も、同じように受け入れます。2:9 そこで、わたしたちも、すべての人に与えられている公平を求めます。キリスト者と呼ばれるからといって、憎まれ、罰せられるのではなく、だれかが訴える事柄について裁かれることを求めます。実際、名が、わたしたちを悪い者にするのに何の役に立つのでしょうか。そして、訴えを晴らした者は放免され、悪人と判明した者は罰せられることを求めます。それも、名のためではなく、不義の行いのためにです。実際、キリスト者であって悪人である者はいません。教えを偽って装っているのではないかぎりです。哲学者たちが裁かれるときも、そうであるのをわたしたちは見ています。2:10 彼らのだれも、裁きの前に、その学問や技のために、裁判官から良い者とも悪い者とも思われません。そうではなく、不義な者と判断されれば罰せられ、中傷を晴らせば放免されます。罰せられても、哲学に罪が負わされることはありません。定めのとおりに哲学しない者が悪いのであって、学問には責めがないからです。では、わたしたちにも同じ公平がなされればよいのです。裁かれる者たちの生き方が調べられ、名はあらゆる罪状から解かれればよいのです。2:11 いとも偉大な皇帝たちよ、わたしたちの教えのために弁明を始めるにあたって、わたしはあなたがたにお願いする必要があります。わたしたちの話を公平に聞き、世間の理に合わないうわさに流されて、先入観にとらわれないでください。そして、学ぶことを愛し、真理を愛するあなたがたの心を、わたしたちの教えにも向けてください。あなたがたは、知らないために過ちを犯さずにすむからです。わたしたちも、多くの人々の分別のないうわさから出た訴えを晴らして、戦いを挑まれなくなるからです。

3:12 人々は、わたしたちに三つの罪を言い立てています。無神論、テュエステスの食事、オイディプスの交わりです。しかし、もしこれらが本当なら、どんな者も容赦しないでください。その不義の行いを罰してください。もしキリスト者のだれかが獣のように生きているのなら、妻も子供ももろとも、わたしたちを根こそぎ殺してください。とはいえ、獣でさえ、同じ種類の仲間には手を出しません。獣は自然の法に従い、子を生むための時期にだけ交わり、勝手気ままには交わりません。また、自分に益を与えてくれる者を見分けます。3:13 それなら、獣よりも野蛮な者がいるとします。その者は、どんな裁きを受ければ、これほどの悪にふさわしく罰せられたとみなされるでしょうか。しかし、もしこれらが作り話であり、むなしい中傷にすぎないとします。それは、悪徳が自然の理によって徳に逆らい、相反するものが神の法によって互いに戦うために起こるのです。そして、わたしたちがそのような不義を何一つ行っていないことについては、あなたがた自身が証人です。わたしたちを告発してはならないと命じているからです。それなら、あとはあなたがたが、わたしたちの生き方と説を調べればよいのです。あなたがたとその家と統治に対する、わたしたちの熱意と従順も調べればよいのです。そうして、ついには、わたしたちを迫害する者たちに認めるのと同じだけのものを、わたしたちにも認めればよいのです。それより多くは何も求めません。わたしたちは真理のためなら、ためらわずにいのちをもささげて、彼らに打ち勝つからです。

訳注

1 当時の二人の称号から、『ゲルマニアの征服者』の写し誤りとみる説がある。

4〜7章　無神論の訴えと、神を一つとした詩人や哲学者

4:14 さて、わたしたちが無神論者でないことについてです。わたしは、罪状の一つひとつに答えることにします。言い立てる者たちの誤りを証明しないのでは、こっけいなことになるからです。実際、アテネの人々がディアゴラスを無神論で訴えたのは、もっともなことでした。ディアゴラスは、オルフェウスの教えを人前にさらし、エレウシスとカベイロイの秘儀を世間に暴きました。かぶを煮るために、ヘラクレスの木像を切り刻みもしました。それだけでなく、神などまったくいないと、はっきり言い放ったのです。4:15 しかし、わたしたちは、神を物質から分けています。そして、物質と神とは別のものであり、そのあいだには大きな隔たりがあることを示しています。神的なものは、生じたのではなく永遠で、知性と理性によってだけ見られるものだからです。それに対して物質は、生じたもので、朽ちるものです。そのようなわたしたちに無神論という名を着せるのは、理に合わないことではないでしょうか。4:16 実際、もしわたしたちがディアゴラスと同じように考えていたとします。神を敬うよりどころを、これほど多く持っていながらです。世界の秩序、すみずみまでの調和、大きさ、色、形、配置がそれです。それなら、神を敬わないという評判も、追われる罪状も、わたしたちに着せられて当然だったでしょう。しかし、わたしたちの教えは、一つの神を立てています。この万物の造り主である神です。そのかたご自身は、生じたのではありません。あるものは生じるのではなく、ないものが生じるからです。そして、そのかたは、ご自分から出たロゴスによって、すべてのものをお造りになりました。ですから、わたしたちは、悪く言われることも迫害されることも、どちらも理に合わない仕打ちとして受けているのです。

5:17 詩人や哲学者たちは、神について考えをめぐらせても、無神論者とはみなされませんでした。エウリピデスは、世間の思い込みに従い、知識もなしに神々と名づけられているものについては、迷いながらこう言います。『もし本当に天にゼウスがいるのなら、同じ者を不幸にしておくべきではなかった』。5:18 しかし、知識によって知性でとらえられるかたについては、知性のとらえるとおりに、はっきりとこう説きます。『高みにいるこの者が、果てしない天空と大地を、湿った腕で抱きかかえているのが見えるか。この者をゼウスと思え。この者を神とみなせ』。5:19 前のほうの神々については、その名が当てはめられている実体が実在するのを、エウリピデスは見なかったからです。実際、『ゼウスがだれなのか、わたしは言葉の上でしか知らない』とも言っています。また、名が実在する事物について言われているのも見ませんでした。実際、実体が実在しないものにとって、名が何の役に立つでしょうか。しかし、後のほうの神は、そのわざから見ていました。見えないものに目を向けて、空気や天空や大地の目に見えるさまを思いめぐらしたのです。5:20 ですから、作られたものはだれのものであり、だれの霊によって導かれているのか。そのかたこそ神であると、エウリピデスはとらえていたのです。ソフォクレスも、この人に声を合わせて、こう言っています。『まことに神は一つ、神は一つである。天と広い大地を造った神は』[1]。エウリピデスは、ご自分のわざを美で満たしておられる神の本性について、二つのことを教えているのです。神がどこにおられなければならないかと、神が一つでなければならないことです。

6:21 フィロラオスも、すべてのものは神によって、牢獄の中にあるように取り囲まれていると言います。こうして、神が一つであることも、物質より上にあることも示しています。リュシスとオプシモスは、神を定義します。リュシスは、神を言い表せない数とし、オプシモスは、最も大きな数がそのすぐ隣の数を超える分とします。ピュタゴラス派によれば、最も大きな数は十です。十はテトラクテュスであり、数の比と調和の比をすべて含んでいます。そして、そのすぐ隣にあるのは九です。それなら、神は単位、つまり一つです。最も大きな数は、自分より小さい、すぐ隣の数を一だけ超えるからです。6:22 次はプラトンとアリストテレスです。わたしが、哲学者たちが神について語ったことを述べるのは、彼ら

の説を細かく披露するためではありません。わたしは、次のことを知っているからです。あなたがたは、賢さと統治の力ですべての人にまさっています。それと同じほど、あらゆる教養を究めることでも、すべての人に勝っています。教養の一部分だけを切り取って専念する者たちでさえ及ばないほど、教養のどの部分にも通じているのです。わたしが述べるのは、名を挙げなければ、神を一つとするのがわたしたちだけではないことを示せないからです。だから、わたしは彼らの見解を取り上げることにしたのです。6:23 さて、プラトンはこう言います。『この万物の造り主であり父である者を見いだすのは難しい。見いだしても、すべての人に語ることはできない』。プラトンは、生じたのではない永遠の神を、一つと考えているのです。たとえ、太陽や月や星のような、ほかの神々を認めているとしても、それらを生じたものとして認めています。『神々の神々よ。わたしはおまえたちの造り主であり、わざの父である。わたしが望まないかぎり、わたしのわざは解かれない。たしかに、結ばれたものはすべて解かれうる』。6:24 それでは、プラトンが、万物の造り主を、生じたのではない一つの神と考えていて、無神論者でないとします。それなら、わたしたちも無神論者ではありません。わたしたちは、神を知り、固く守っているからです。その神は、ロゴスによってすべてのものをお造りになり、ご自分から出た霊によってすべてのものを支えておられます。6:25 アリストテレスとその学派は、一つの神を立て、神は、いわば合成された生き物のように、魂とからだから成ると言います。神のからだは、天空の領域、すなわち惑星と、恒星の天球であって、円を描いて動いていると考えます。神の魂は、からだの動きをつかさどる理であって、それ自体は動かず、からだの動きの原因となっていると考えます。6:26 ストア派の人々は、物質の移り変わりに応じた呼び名によって、神的なものを多くの名で呼び分けています。彼らは、その物質の中を神の霊が行き渡ると言います。しかし、たとえそうしていても、少なくとも事実の上では、神を一つと考えているのです。実際、彼らによれば、神は技をもつ火であり、道を進んで世界を次々に生み出していきます。その火は、種子となる理をすべて含んでいて、この理に従って、一つひとつのものが運命のとおりに生じます。そして、神の霊は世界全体に行き渡っています。それなら、彼らによれば、神は一つです。神は、物質の沸き立つところに応じてゼウスと呼ばれ、空気に応じてヘラと呼ばれます。そして、神が行き渡っている物質のほかの部分ごとに、ほかの名で呼ばれるのです。

7:27 こうして、万物の始まりにまで考えを進める人々はみな、望まなくても、たいていは神的なものが一つであることで一致します。そして、わたしたちは、この万物を整えられたかたこそ神であると、固く主張しています。それなのに、どういうわけで、彼らには、神的なものについて思うままに語り、書くことが、恐れなく許されているのでしょうか。そして、わたしたちに対しては、法が定められているのでしょうか。わたしたちは、自分たちが考え、正しく信じていることを、真理のしるしと論拠によって示すことができるのです。それは、神が一つであることです。7:28 実際、詩人や哲学者たちは、ほかのことと同じように、この事柄にも推測によって取り組みました。神から出た息吹との結びつきによって、それぞれが自分の魂に動かされ、真理を見いだし、悟れるかどうかを探ろうとしたのです。しかし、真理をとらえきるほどの力があるとは見いだされませんでした。神について、神から学ぼうとするのではなく、それぞれが自分自身から学ぼうとしたからです。そのため、彼らはそれぞれ違う説を立てました。神について、物質について、形相について、世界についてです。7:29 しかし、わたしたちには、自分たちが考え、信じていることについて、証人として預言者たちがいます。預言者たちは、神に満たされた霊によって、神について、また神に関わることについて語りました。あなたがたも、賢さと、まことに神的なものへの敬虔とで、ほかの人々にまさっているのですから、こう言うでしょう。神から出た霊は、預言者たちの口を楽器のように動かしました。その霊を信じることをやめて、人間の見解に心を向けるのは、理に合わないことだ、と。

訳注

1 この二行はソフォクレスの作ではなく、後代の偽作とされる。

8〜10章　神が一つであることの論証と、父と子と聖霊

8:30 それでは、この万物の造り主である神が、初めから一つであることを、次のように考えてみてください。わたしたちの信仰を支える推論も、あなたがたにわかるようにするためです。もし初めから二つ、あるいはそれ以上の神々がいたとします。その神々は、一つの同じもののうちにいたか、それぞれが別々にいたかの、どちらかです。8:31 さて、一つの同じもののうちにいることは、できなかったはずです。神々だからといって、似ているわけではないからです。そうではなく、生じたのではないものだから、似ていないのです。実際、生じたものは、その手本に似ています。しかし、生じたのではないものは、似ていません。何かから生じたのでも、何かに倣って生じたのでもないからです。それとも、手と目と足は一つのからだの部分であり、それらが合わさって一人の人を成しています。それと同じように、神は一つなのでしょうか。しかし、ソクラテスは、生じたもので朽ちるものですから、組み合わされていて、部分に分けられます。けれども、神は、生じたのではなく、苦しみを受けず、分けられないかたです。ですから、部分から成ってはおられないのです。8:32 では、神々がそれぞれ別々にいたとします。世界を造られたかたは、生じたものの上におられ、ご自分が造り、整えられたもののまわりにおられます。それなら、もう一つの神や、残りの神々は、どこにいるのでしょうか。8:33 実際、世界は球の形に仕上げられ、天の円によって閉じ込められています。そして、世界の造り主は、生じたものの上におられ、それらへの摂理によって世界を治めておられます。それなら、もう一つの神や残りの神々のいる場所は、どこにあるのでしょうか。実際、その神は、世界の中にはいません。世界は、別の神のものだからです。また、世界のまわりにもいません。世界の上には、世界の造り主である神がおられるからです。では、世界の中にも、世界のまわりにもいないとします（世界のまわりはすべて、このかたが占めておられるからです）。それなら、その神はどこにいるのでしょうか。世界と神よりも上でしょうか。別の世界の中か、別の世界のまわりでしょうか。しかし、もし別の世界の中か、そのまわりにいるのなら、その神は、もはやわたしたちに関わりがありません。この世界を治めてもいないからです。また、その神自身、力において大きくもありません。限られた場所にいるからです。では、別の世界の中にもいないとします。すべては、このかたが満たしておられるからです。別の世界のまわりにもいないとします。すべては、このかたが占めておられるからです。それなら、その神は、そもそもいないのです。その神のいる場所がないのですから。8:34 あるいは、世界は別の神のものであり、もう一つの神自身は、世界の造り主よりも上にいるとします。しかし、世界の中にも、世界のまわりにもいないとします。それなら、その神は何をしているのでしょうか。それとも、その神がどこかに立つための、何か別のものがあるのでしょうか。しかし、世界の上には、神と、神に属するものとがあります。このかたが、世界の上にあるものを満たしておられるのに、どんな場所があるというのでしょうか。それとも、その神は摂理を行っているのでしょうか。けれども、摂理を行わないのなら、その神は何も造っていないのです。その神が、造りもせず、摂理も行わず、いるための別の場所もないとします。それなら、初めから一つであり、ただ一つの神であるのは、世界の造り主であるこのかたです。

9:35 たしかに、もしわたしたちがこのような考えだけで満足していたとします。それなら、わたしたちの教えは人間から出たものだと、だれかが考えたことでしょう。しかし、実際には、預言者たちの声が、わたしたちの推論を確かなものにしています。あなたがたは、学ぶことを何より好み、知識に最も富んでいます。ですから、モーセやイザヤやエレミヤ、そのほかの預言者たちの言葉を知らないはずはないと、わたしは思います。預言者たちは、神の霊に動かされ、自分の中の思いを離れて、霊に働かされたことを声に出して語りました。霊は、笛吹きが笛に息を吹き込むように、彼らを用いたのです。では、この預言者たちは何と言っているでしょうか。『主はわたしたちの神である。ほかのだれも、このか

たと並べられることはない』。9:36 また、こうも言います。『わたしは初めの神であり、この後も神である。わたしのほかに神はない』（イザヤ四四・六）。同じように、『わたしより前に生じたほかの神はなく、わたしより後にもない。わたしは神であって、わたしのほかにはない』（イザヤ四三・一〇～一一）。9:37 また、神の大きさについては、こう言います。『天はわが位、地はわが足台である。あなたがたはわたしのためにどんな家を建てようとするのか。またどんな所がわが休み所となるのか』（イザヤ六六・一）。その書物そのものを手に取って、預言者たちの預言をもっと詳しく調べることは、あなたがたにゆだねます。しかるべき推論によって、わたしたちに加えられている侮辱を取り除くためです。

10:38 つまり、わたしたちが無神論者でないことは、十分に示しました。わたしたちは、一つの神を立てているからです。その神は、生じたのではなく、永遠で、目に見えず、苦しみを受けず、つかむことができず、何ものにも収まりません。知性と理性によってだけとらえられ、光と美と霊と、言い表せない力とに包まれておられます。そして、ご自分のロゴスによって万物を生じさせ、整え、保っておられます。10:39 実際、わたしたちは、神の子をも認めています。だれも、神に子があることを、こっけいだと思わないでください。わたしたちは、父なる神についても、子についても、詩人たちが作り話をするように考えてきたのではないからです。詩人たちは、神々を、人間より少しもすぐれていない者として描いています。10:40 かえって、神の子は、形相と働きにおいて、父のロゴスです。父と子とは一つであり、すべてのものは、このかたに倣い、このかたによって生じたからです。子は父のうちにおられ、父は子のうちにおられます。霊の一致と力によってです。こうして、神の子は、父の知性であり、ロゴスなのです。

10:41 あなたがたが、並外れた賢さのゆえに、『子』とは何を意味するのかを調べてみようと思うなら、手短に言います。子は、父から最初に生み出されたかたです。そう言うのは、子が生じたという意味ではありません。神は、永遠の知性であって、初めからご自分のうちにロゴスを持っておられたからです。永遠に、ロゴスを持つかたなのです。そうではなく、子が、物質的なものすべての形相となり、働きとなるために、出て来られたという意味です。そのとき、物質的なものはすべて、性質のない本性や役に立たない土のように、土台として横たわっていました。粗いものが、その上の軽いものと混ざり合っていたのです。10:42 預言の霊も、この論に声を合わせています。実際、『主は、ご自分の道の初めとして、そのわざのためにわたしを造られた』と言っています（箴言八・二二）。しかも、わたしたちは、預言して語る人々のうちに働く聖霊そのものも、神から流れ出たものだと言っています。聖霊は、太陽の光線のように、神から流れ出て、また神へと帰っていきます。10:43 わたしたちは、父なる神と子なる神と聖霊とを言い表しています。そして、その一致のうちにある力と、順序のうちにある区別とを示しています。ですから、そのような者たちが無神論者と呼ばれていると聞いて、当惑しない人がいるでしょうか。10:44 また、わたしたちの教えの、神についての部分は、これだけにとどまりません。それどころか、わたしたちは、御使と仕える者たちの大きな群れがいることも言っています。世界の造り主であり作り手である神は、ご自分から出たロゴスによって、彼らに持ち場を分け与え、配置されました。元素と天と世界と、世界の中にあるもの、そしてそれらの秩序にかかわるようにです。

11〜14章　キリスト者の生き方と、犠牲と町々の神々

11:45 わたしたちの教えを、わたしが詳しく述べても、驚かないでください。わたしが細かく語るのは、あなたがたが世間の理に合わない考えに一緒に流されず、真実を知ることができるためだからです。それに、わたしたちは、自分たちが心を向けている説そのものによっても、あなたがたを説得することができるからです。わたしたちを無神論者のように見ないようにです。その説は、人間のものではなく、神が語られ、神が教えられたものです。11:46 では、わたしたちを養い育てている言葉とは、どのようなものでしょうか。『わたしはあなたがたに言う。あなたがたの敵を愛し、のろう者を祝福し、あなたがたを迫害する者のために祈れ。こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである。父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らしてくださる』（マタイ五・四四〜四五、ルカ六・二八）。11:47 ここで、論を、大きな叫びとともにはっきりと聞こえるものにして、はばかることなく語らせてください。わたしは、哲学者である皇帝たちの前で弁明する者として、そうするのです。実際、三段論法を分析し、あいまいな言い方を解きほぐし、語源を明らかにする人々がいます。また、同名異義のものと同名同義のもの、範疇と命題、何が主語で何が述語かを論じる人々がいます。彼らは、こうした言葉やそれに類する言葉によって、弟子たちを幸せにすると約束しています。そのうちのだれが、これほど魂を清められているでしょうか。敵を憎むかわりに愛し、先にののしってきた者たちを、悪く言い返すかわりに祝福するほどにです（言い返すのが、いちばん控えめな仕返しなのですが）。いのちをねらって企む者たちのために祈るほどにです。反対に、彼らは、悪意をもって、これらの秘められた事柄を、いつも自分のために掘り出し続けています。いつも何か悪いことをしようと望み、自分の営みを、言葉の技にして、行いを示すことにはしていません。11:48 しかし、わたしたちのもとでは、学のない人々や職人や老女たちが見られるでしょう。彼らは、わたしたちの教えから来る益を、言葉で示すことはできないかもしれません。けれども、自分で選んだ生き方から来る益を、行いで示しています。言葉をそらんじて語るのではなく、良い行いを示すからです。打たれても打ち返さず、奪われても訴えず、求める者には与え、隣り人を自分のように愛するのです（マタイ五・三九〜四〇、四二、ルカ六・二九〜三〇）。

12:49 それでは、もし神が人間の種族を見守っておられると考えていなかったなら、わたしたちは、これほど自分を清めていたでしょうか。そうは言えません。そうではなく、わたしたちは、この世の生涯のすべてについて神に申し開きをすると確信しています。わたしたちと世界とを造られた神にです。ですから、慎み深く、人を愛し、人に見下されるような生き方を選んでいるのです。この世では、たとえだれかにいのちを奪われても、あちらで受けるものと比べられるほどの悪は受けないと考えているからです。あちらでは、柔和で、人を愛し、寛容な生き方のゆえに、偉大な裁き主から報いを受けるのです。12:50 たしかに、プラトンは、ミノスとラダマンテュスが裁きを行い、悪人を罰すると言いました。けれども、わたしたちはこう言っています。たとえだれかがミノスやラダマンテュスであっても、また彼らの父であっても、その者でさえ神の裁きを逃れません。12:51 人生とは『食い、かつ飲もう、明日は死ぬのだから』ということだと考える人々がいます（イザヤ二二・一三、第一コリント一五・三二）。死を深い眠りと忘却とみなす人々です（『眠りと死、ふたごの兄弟』）。その人々は、神を敬っていると信じられています。一方、わたしたちは、この世の生涯を、わずかな、小さな値打ちしかないものと考えています。そして、ただ一つのことによって、来たるべき生涯へと導かれていきます。神と、神から出たロゴスとを知ることです。子と父との一致とは何か、父と子との交わりとは何か、霊とは何かを知ることです。また、霊と子と父という、これほどのものの一致とは何か、一つにされているものの区別とは何かを知ることです。また、わたしたちは、待ち受けてい

る生涯が、言葉で言い表せるよりもはるかにすぐれていることを知っています。すべての不義の行いから清くされて、そこへ導かれるならばです。さらに、わたしたちは、友を愛するだけにとどまらないほど、人を愛します。実際、『あなたがたが、愛する者を愛し、あなたがたに貸す者に貸したからとて、なんの報いがあろうか』と言われています（マタイ五・四六、ルカ六・三二、三四）。わたしたちは、このような者であり、裁きを逃れるために、このような生き方をしています。それなのに、神を敬っていると信じてもらえないのでしょうか。12:52 つまり、これらは、大きなことのうちの小さなこと、多くのことのうちのわずかなことです。あなたがたを、これ以上わずらわせないためです。実際、蜜や乳清を確かめる人も、全体のわずかな部分で、全体が良いかどうかを確かめるのです。

13:53 わたしたちを無神論で訴える人々の多くは、神が何であるかを夢にも知りません。自然の理にも神についての理にも、学ばず、目を向けたこともありません。そして、敬虔を犠牲の決まりで測り、わたしたちが町々と同じ神々を認めないことを訴えています。そこで、皇帝たちよ、その二つのことについて、次のように考えてみてください。まず、わたしたちが犠牲をささげないことについてです。13:54 この万物の造り主であり父である神は、血も、脂を焼く煙も、花や香から立つかおりも、必要とされません。ご自身が完全なかおりであり、内に欠けるものがなく、外から何も必要とされないからです。かえって、このかたへの最大の犠牲は、わたしたちが知ることです。だれが天を広げて球の形にし、地を中心のように据えられたのか。だれが水を集めて海とし、光をやみから分けられたのか。だれが星で天空を飾り、地があらゆる種を芽生えさせるようにされたのか。だれが生き物を造り、人を形づくられたのか。13:55 わたしたちは、造り主である神を、自分の神としています。このかたは、知識と技とによって万物を保ち、見守り、それによって万物を導いておられます。わたしたちがこのかたに清い手を上げるとき、このかたが、なおどんな百頭の牛の犠牲を必要とされるでしょうか。『人々は、犠牲とやさしい祈りと、注ぎの供え物と脂を焼く煙とで、神々の心を変えさせる。だれかが掟を踏み越え、罪を犯したときに、願い求めて』。神が必要とされない燔祭が、わたしに何になるでしょうか。とはいえ、血を流さない犠牲をささげ、理にかなった礼拝をささげなければなりません。

14:56 次に、わたしたちが町々と同じ神々のもとに行かず、それを認めないということについてです。これは、彼らの、まったく愚かな言い分です。わたしたちを無神論で訴える人々は、わたしたちが、自分たちの知っている神々と同じ神々を認めないからだと言います。しかし、その人々でさえ、神々について互いに一致していないのです。14:57 かえって、アテネの人々は、ケレオスとメタネイラを神々として祀っています。ラケダイモン人はメネラオスを祀り、彼に犠牲をささげ、祭りを行っています。トロイアの人々は、メネラオスの名を聞くことさえ嫌がり、ヘクトルをあがめています。ケオスの人々は、アリスタイオスを、ゼウスともアポロンとも同じ神だと考えています。タソスの人々はテアゲネスを祀っています。この者は、オリンピアの競技で人を殺したことさえありました。サモスの人々はリュサンドロスを祀っています。あれほどの殺戮と、あれほどの悪事を行った者をです。アルクマンとヘシオドスはメディアを[1]、キリキヤ人はニオベを神としています。シチリア人はブタキデスの子フィリッポスを、アマトスの人々はオネシロスを、カルタゴ人はハミルカルを神としています。その数を数え上げていけば、一日では足りないでしょう。14:58 それでは、彼ら自身が自分たちの神々について互いに食い違っているのに、なぜ、同調しないわたしたちを訴えるのでしょうか。また、エジプト人のすることは、こっけいでさえあるのではないでしょうか。彼らは、祭りのたびに神殿で、死んだ者のためのように胸を打ちたたき、神々に対するように犠牲をささげるからです。それも少しも不思議ではありません。彼らは、獣さえ神々として認め、それが死ぬと頭をそり、神殿に葬り、町を挙げて嘆きの声を上げるのですから。そうであれば、わたしたちが、彼らと同じ仕方で神を敬わないために、神を敬わない者だとします。それなら、すべての町も、すべての民も、神を敬わない者です。すべての者が同じ神々を認めているわけではないからです。

訳注

1 写本の乱れた箇所で、詩人の名は後の書き込みとみる説がある。

15〜17章　物質と神の区別と、像の起源

15:59 しかし、彼らが同じ神々を認めているとすればよいのです。それでどうなるのでしょうか。多くの人々は、何が物質で何が神か、両者の隔たりがどれほどかを見分けられません。そして、物質から作られた偶像のもとに行きます。だからといって、わたしたちも、彼らのゆえに、像のもとに行って拝むのでしょうか。わたしたちは、生じたのではないものと生じたもの、あるものとないものとを見分けて区別しています。知性でとらえられるものと感覚でとらえられるものとも区別し、そのそれぞれにふさわしい名を与えているのです。15:60 実際、もし物質と神とが同じもので、一つの事柄に二つの名があるだけなら、わたしたちは神を敬わない者です。石や木、金や銀を神々として認めていないからです。しかし、もし両者が互いに大きく隔たっているとします。その隔たりが、職人と、その技のための材料とのあいだほどもあるとします。それなら、なぜわたしたちは訴えられるのでしょうか。15:61 陶器師と粘土の関係は、神が造り主であり、物質が神に従ってその技を受けるという関係と同じだからです。粘土は物質で、陶器師は職人です。しかし、粘土は、それだけでは、技なしに器となることができません。それと同じように、あらゆるものを受け入れる物質も、造り主である神なしには、区別も形も秩序も受けませんでした。15:62 また、わたしたちは、陶器を、それを作った者よりも重んじることはありません。杯や金の器を、それを打ち出した者よりも重んじることもありません。そうではなく、それらに技の上で何かすぐれたところがあれば、職人をほめます。器から誉れを受けるのは、この職人です。物質と神についても同じです。秩序づけられたものの配置の誉れと栄誉を正当に受けるのは、物質ではなく、物質の造り主である神です。ですから、物質のさまざまな形を神々として認めるなら、わたしたちは、存在しておられる神を感じとれない者と思われるでしょう。解けて朽ちるものを、永遠のものと等しくすることになるからです。

16:63 実際、世界はたしかに美しいものです。大きさの点ですぐれ、黄道にある星々と、熊座のまわりの星々との配置の点でも、球である形の点でも美しいのです。しかし、世界を拝むべきではなく、その職人を拝むべきです。実際、あなたがたのもとに来る臣民たちも、あなたがたに仕えることをなおざりにして、宮殿の荘厳さに頼ったりはしません。あなたがたは支配者であり主人であって、臣民はあなたがたから、必要とするものを得るのです。かえって、王宮には、行き当たったときに、美しく飾られているのに通りすがりに感嘆するだけです。そして、あなたがたを、すべてにおいてすべてである者として重んじるのです。16:64 また、皇帝であるあなたがたは、自分のために王宮を飾ります。しかし、世界は、神がそれを必要とされたから生じたのではありません。神は、ご自身にとって、ご自身がすべてだからです。神は、近づきがたい光であり、完全な世界であり、霊、力、ロゴスであられます。それでは、世界が、調子の整った楽器で、拍子に合わせて動いているのなら、わたしは楽器を拝みません。音を整えて打ち鳴らし、調べの合った歌を歌われるかたを拝むのです。競技でも、審判たちは、琴を弾く者たちをさしおいて、その琴に冠をかぶせたりはしないからです。16:65 プラトンが言うように、世界が神の技の作品であるなら、わたしは、その美しさに感嘆しながら、職人のもとに行きます。ペリパトス派の人々が言うように、世界が神の実体でありからだであるとします。その場合も、わたしたちは、貧弱で無力な元素へと落ちていくことはしません。からだの動きの原因である神を拝むことを、なおざりにはしないのです。彼らの説く苦しみを受けない空気のうちに、苦しみを受ける物質を拝んだりもしません。また、だれかが世界の部分を神の力と考えるとします。その場合も、わたしたちは、その力のもとに行って仕えるのではなく、その力の造り主であり主であるかたに仕えるのです。16:66 わたしは、物質に、それが持っていないものを求めません。神をさしおいて元素に仕えることもしません。元素には、命じられた以上のことは何も許されていないのです。

実際、元素は、造り主の技によって見た目には美しくても、それ自身は物質の本性のままのものです。16:67 この論には、プラトンも証言しています。彼はこう言うからです。『天とも世界とも名づけられたものは、父から多くの幸いなものを分け与えられた。しかし、からだにもあずかっている。それゆえ、変化と無縁であることはできない』。それでは、わたしは、天と元素とに、その技のゆえに感嘆しても、それを神々として拝みません。それらには解かれる定めがあることを知っているからです。そうであれば、人間が作り手であると知っているものを、どうして神々と呼べるでしょうか。では、手短に考えてみてください。

17:68 弁明する者は、名についても像についても、もっと詳しく推論を示す必要があります。名については、それが新しいものであることを、像については、いわば昨日今日できたものであることを示すのです。もっとも、あなたがたも、これをもっとよく知っています。何事においても、だれよりも、古人たちに親しんでいるからです。そこで、わたしは言います。オルフェウスとホメロスとヘシオドスこそが、彼らが神々と呼んでいるものに、生まれと名とを与えた者たちです。17:69 ヘロドトスもこれを証言しています。彼はこう言うからです。『ヘシオドスとホメロスは、年代において、わたしより四百年前の人々だと思う。それより多くはない。この人々こそ、ギリシャ人のために神々の系譜を作った者たちである。神々に呼び名を与え、栄誉と技とを割り当て、その姿を示したのである』。17:70 また、像は、塑像の技も絵の技も彫像の技もまだなかったあいだは、用いられてもいませんでした。サモスのサウリアス、シキュオンのクラトン、コリントのクレアンテス、それにコリントのある娘が現れてからのことです。影の輪郭を描く技は、サウリアスが見いだしました。日なたで、馬の影の輪郭をなぞったのです。絵の技は、クラトンが見いだしました。白く塗った板に、男と女の影を塗ったのです。そして、娘から、土人形の技が見いだされました。娘はある男を恋していて、彼が眠っているあいだに、壁に映ったその影の輪郭をなぞったからです。それから、父親は、それがそっくりに似ていることを喜びました（父親は陶器を作っていました）。そして、輪郭を彫り出して、粘土で埋めたのです。その浮き彫りは、今もなおコリントに残っています。17:71 この人々の後に、ダイダロスとミレトのテオドロスが現れ、彫像の技と塑像の技とを見いだし加えました。このように、像と、偶像をめぐる営みとが経てきた時は、これほど短いのです。それぞれの神の職人の名を言えるほどです。17:72 実際、エペソのアルテミスの像とアテナの像は、ダイダロスの弟子エンドイオスが作りました。いや、アテナではなく、アテラの像と言うべきでしょう。奥義に通じた人々の言い方では、アテラだからです。実際、オリーブの木で作った古い像は、そう呼ばれています[1]。座った女神の像も、エンドイオスが作りました。ピュティアのアポロンは、テオドロスとテレクレスの作です。デロスのアポロンとアルテミスは、テクタイオスとアンゲリオンの技です。サモスとアルゴスのヘラは、スミリスの手によるものです。ほかの偶像は、フェイディアスの作です。クニドスのアフロディテ、あの遊女は[2]、プラクシテレスの技です。エピダウロスのアスクレピオスは、フェイディアスの作です。17:73 要するに、それらのうち、人間によって作られたことを免れたものは一つもありません。それでは、それらが神々なら、なぜ初めからいなかったのでしょうか。なぜ、作った者たちよりも新しいのでしょうか。なぜ、生じるために人間と技とを必要としたのでしょうか。これらは、土であり、石であり、物質であり、手の込んだ技にすぎません。

訳注

1 この三文は、後の読者の書き込みとみる説がある。

2 『遊女』を『別の』と読む写本もある。

18〜20章　神々の生まれと、そのからだと行い

18:74 さて、ある人々はこう言います。これらは像であって、神々とは、像が写しているもののことだ。人々が像のもとに行ってする参拝も、ささげる犠牲も、神々へと向けられ、神々に対してなされるのだ。神々のもとに行くには、このほかに道はない。『神々は、はっきりと姿を現しがたい』のだ、と。そして、そのとおりである証拠として、いくつかの偶像の働きを挙げます。そこで、名に結びついている神々の力を調べてみましょう。18:75 いとも偉大な皇帝たちよ、論に入る前に、あなたがたにお願いしておきます。真実の推論を示すわたしを、許してください。偶像の誤りを証明することが、わたしの目的ではないからです。そうではなく、わたしは中傷を晴らしながら、わたしたちの選んだ道について推論を示しているのです。あなたがたが、自分自身のことから、天上の統治をも調べることができますように。実際、父と子であるあなたがたは、統治を上から受け、すべてのものがあなたがたの手に服しています。預言の霊が言うとおり、『王の魂は神の手のうちにある』からです（箴言二一・一）。それと同じように、すべてのものは、一つの神と、神から出たロゴスである子とに従わされています。この子は、神と分かたれないかたとして考えられるのです。18:76 では、ほかのことより先に、次のことを考えてみてください。彼ら自身が言うように、神々は初めからいたのではなく、そのそれぞれが、わたしたちと同じように生じたのです。この点で、彼らはみな声をそろえています。実際、ホメロスはこう言います。『神々の源オケアノスと、母テテュス』。オルフェウスは、神々の名を最初に見いだし、その生まれを語り尽くし、それぞれが何をしたかを語った者です。彼らのあいだでは、だれよりも真実に神々について語った者と信じられています。ホメロスも、多くの点で、とりわけ神々については、この人に従っています。このオルフェウスも、神々の最初の生まれを水からとして、こう言います。『オケアノスこそ、すべてのものの源となった』[1]。18:77 オルフェウスによれば、万物の始まりは水だったからです。水から泥が生じ、その両方から一つの生き物が生まれました。それは蛇で、獅子の頭が生えついており、そのあいだに神の顔がありました。名はヘラクレス、またクロノス（時）といいます。18:78 このヘラクレスが、途方もなく大きな卵を生みました。卵は満ちると、生んだ者が力をこめてこすったために、二つに割れました。こうして、その頂の部分は天となり、下へ落ちた部分は地となりました。18:79 また、大地の女神ゲーも、からだを備えて現れました。ウラノス（天）はゲーと交わって、娘として、クロト、ラケシス、アトロポスを生みます。息子として、百の手を持つコッテュス、ギュゲス、ブリアレオスを生みます。また、キュクロプスたち、ブロンテス、ステロペス、アルゴスを生みます。ウラノスは、子供たちによって支配の座から追われると知り、彼らを縛ってタルタロスに投げ込みました。そのため、ゲーは怒って、ティタンたちを生んだのです。『尊いガイアは、ウラノスの子である若者たちを生んだ。人々は彼らをティタンとも呼ぶ。星をちりばめた大いなるウラノスに、報いを受けさせたからである』。

19:80 これが、彼らの言う神々と万物との生まれの始まりです。では、どういうことになるでしょうか。実際、神々として語られているものは、どれも、初めからあるものと考えられています。もし、神々について語る者たちの言うとおり、神々がもとはなかったのに生じたのなら、神々はいないことになるからです。実際、ものは、生じたのではなくて永遠であるか、生じたもので朽ちるか、そのどちらかです。19:81 これは、わたしがそう言い、哲学者たちが別のことを言う、というのではありません。『常にあって、生成を持たないものは何か。生じはするが、決してあることのないものは何か』。プラトンは、知性でとらえられるものと感覚でとらえられるものについて論じて、こう教えています。常にあるもの、つまり知性でとらえられるものは、生じたのではない。ないもの、つまり感覚でとらえられるものは、生じたもので、始まりがあり終わりがある。ストア派の人々も、この理屈によって、万物は燃え尽き、世界が別の始まりを得て、再びあ

るようになると言っています。19:82 彼らによれば、原因は二つあります。一つは働きかけて始めるもので、摂理がこれに当たります。もう一つは働きを受けて変わるもので、物質がこれに当たります。それにもかかわらず、世界は、摂理を受けていても、生じたものなので、同じ状態にとどまることができません。もしそうなら、本性によってあるのではなく生じた神々の成り立ちが、どうしてとどまるでしょうか。19:83 また、水から成り立っている神々が、どうして物質よりすぐれているでしょうか。いや、彼らの説によってさえ、水が万物の始まりなのではありません。単純で一様な元素から、何が成り立つことができるでしょうか。物質には職人がなければならず、職人には物質がなければなりません。そうでなければ、物質か職人がないのに、どうして形作られたものが生じるでしょうか。また、物質が神よりも古いというのも、道理に合いません。作る原因が、生じるものより先に始まっていることは、必然だからです。

20:84 たしかに、彼らの神々についての語りの信じがたさが、そこまでで止まっていたとします。神々は生じたと言い、水から成り立つと言うところまでです。それなら、わたしは、残りの罪状に移っていたでしょう。生じたもので解けないものは一つもないと、すでに示したからです。20:85 しかし、彼らは、一方では、神々のからだのありさまをこう述べました。ヘラクレスはとぐろを巻く蛇の神だと言い、ほかの者たちについては、百の手を持つと言ったのです。また、ゼウスの娘についても述べました。ゼウスが、ほかならぬ自分の母、レアまたはデメテルによってもうけた娘です。彼らによれば、この娘は、本来の二つの目のほかに、額にも二つの目を持っていました。首の後ろ側には顔があり、角も生えていました。そのため、母レアは、子供の怪異な姿を恐れて逃げ、乳を与えませんでした。そこから、娘は、奥義に通じた人々の言い方ではアテラと呼ばれ、ふつうにはペルセフォネともコレとも呼ばれています。この女神は、瞳（コレ）から名づけられたアテナとは別の女神です。20:86 また、他方では、彼らは、神々のしたことを、自分たちが思うとおりに詳しく語っています。クロノスについては、父の陰部を切り取り、父を戦車から投げ落としたことを語ります。また、男の子供たちを飲み込んで、わが子を殺していったことも語ります。ゼウスについては、父を縛ってタルタロスに投げ込んだことを語ります。ウラノスが息子たちにしたのと同じです。また、支配をめぐってティタンたちと戦ったことも語ります。母レアが彼との結婚を拒むと、ゼウスは彼女を追い回しました。レアが雌の蛇になると、ゼウスも蛇に姿を変え、ヘラクレスの結び目と呼ばれる結び方で彼女を縛って交わったのです。その交わりの姿を表すしるしが、ヘルメスの杖です。それから、娘ペルセフォネとも、これまた蛇の姿で、力ずくで交わったと語ります。彼女から、ゼウスに子のディオニュソスが生まれたのです。20:87 そうである以上、少なくともこれだけは言わざるをえません。クロノスやゼウスやコレやほかの者たちを神々だと信じるほどの、どんな尊さや良さが、このような物語にあるのでしょうか。からだのありさまにでしょうか。また、判断力があり、思索を重ねた人のだれが、神からまむしが生まれたと信じるでしょうか。オルフェウスはこう歌っています。『ファネスは、聖なる胎から、別の恐ろしい子を生んだ。見るも恐ろしい姿のまむしである。その頭からは髪が垂れ、顔は見るに美しかった。しかし、首の先から下の部分は、恐ろしい蛇のものだった』。20:88 また、だれが、ファネスその人についての話を受け入れるでしょうか。ファネスは、最初に生まれた神とされています。あの卵から流れ出たのが、このファネスだからです。そのファネスが、蛇のからだか姿を持っていると言うのです。また、ゼウスが何ものにも収まらない者となるために、ゼウスに飲み込まれたと言うのです。実際、もし神々が最も卑しい獣と少しも違わないなら、神々ではありません。神的なものが、地上のものや、物質から分かれ出たものと違っていなければならないのは、明らかだからです。それなら、わたしたちは、なぜ彼らのもとに行くのでしょうか。彼らの生まれは家畜のようであり、彼ら自身は獣の姿をして醜いのです。

訳注

1 この一行は、ホメロス『イリアス』一四・二四六の行と同じ。

21〜22章　神々の情念と、自然学による解釈

21:89 もっとも、彼らが言ったのが、神々は肉のからだを持ち、血も精も持ち、怒りや欲望の情念も持つ、ということだけだったとします。それでも、このような話は、たわごとであり、笑いぐさだと考えなければならなかったでしょう。神には、怒りも、欲望や欲求も、子を生む精もないからです。それなら、神々は肉のからだを持つとすればよいのです。ただし、憤りや怒りにはまさっているとすればよいのです。そうすれば、アテナが『父ゼウスに腹を立て、激しい怒りが彼女をとらえる』姿で見られることもないでしょう。ヘラが『ヘラの胸は怒りを収めきれず、彼女は口を開いた』姿で見られることもないでしょう。21:90 また、悲しみにもまさっているとすればよいのです。『ああ、わたしの愛する人が城壁のまわりを追われるのを、この目で見ている。わたしの心は嘆いている』。実際、わたしは、怒りや悲しみに負ける者は、人間であっても、無知で愚かだと言います。人々と神々の父は、息子のために嘆きます。『ああ、わたしは悲しい。人々のうちでわたしの最も愛するサルペドンが、メノイティオスの子パトロクロスの手に倒れる定めとは』。そして、嘆きながらも、息子を危険から救い出すことができません。『サルペドンはゼウスの子。だがゼウスは、自分の子さえ守らない』。そのようなとき、こうした物語をもとに神々を愛する者たち、いや、むしろ無神論者たちの無知を、責めない者がいるでしょうか。21:91 神々は肉のからだを持つとすればよいのです。しかし、アフロディテが、からだをディオメデスに傷つけられてはなりません。『テュデウスの子、猛きディオメデスがわたしを傷つけた』。魂をアレスに傷つけられてもなりません。『ゼウスの娘アフロディテは、足の不自由なわたしをいつも辱め、破滅をもたらすアレスを愛している』。（欠け）『その美しい肌を裂いた』。戦いに恐ろしい者、ティタンたちに立ち向かったゼウスの味方が、ディオメデスより弱く見えるのです。『槍を振るうアレスのように荒れ狂った』（後略）。ホメロスよ、黙りなさい。神は荒れ狂いません。それなのに、あなたは、その神を、血に汚れた者、人間を滅ぼす者として語ります。『アレスよ、アレスよ、人間を滅ぼす者、血に汚れた者よ』。また、その姦淫と、縛られたことを詳しく語ります。『二人は寝床に上って眠った。すると、知恵に富むヘファイストスの巧みな縛めがまわりに流れかかり、手足を少しも動かせなかった』。21:92 彼らは、神々について、このように多くの、神を敬わないたわごとを並べ立てているではありませんか。ウラノスは陰部を切り取られ、クロノスは縛られてタルタロスに落とされます。ティタンたちは反逆し、ステュクスは戦いの中で死にます。これでは、神々が死ぬ者でもあると示していることになります。神々は互いに恋し、人間に恋します。『アイネイアス。尊いアフロディテが、アンキセスによって生んだ子である。女神が、イデの山の山腹で、死ぬべき人間と寝たのである』。神々は恋をしているではありませんか。情念に動かされているではありませんか。なるほど、神々なのですから、欲望が彼らに触れることはないでしょう！　たとえ神が、神のご計画によって肉をとられるとしても、それで欲望の奴隷にならられるでしょうか。『女神への恋も、女への恋も、これほどわたしの胸の内にあふれて、心を打ち負かしたことはない。イクシオンの妻を恋したときも、くるぶしの美しいアクリシオスの娘ダナエのときも、これほどではなかった。名高いフォイニクスの娘のときも、セメレのときも、テーバイのアルクメネのときも、これほどではなかった。髪の美しい女王デメテルのときも、誉れ高いレトのときも、おまえ自身のときでさえ、これほどではなかった』。21:93 彼は生じたもので、朽ちるもので、神であるところを何一つ持っていません。そればかりか、神々は人間に雇われて仕えます。『アドメトスの館よ。わたしはここで、神でありながら、雇われ人の食卓に甘んじることを耐え忍んだ』。また、牛を飼います。『わたしはこの地に来て、この家の主のために牛を飼い、この家を守ってきた』。それなら、アドメトスのほうが神よりもすぐれているのです。21:94 ああ、予言者よ、知恵ある者よ、ほかの者たちのためには来たるべきことを前もって知る者よ。あなたは、愛する者が殺されることを予言

しませんでした。それどころか、自分の手で、親しい者を殺したのです。『わたしも、ポイボスの神聖な口は偽らないと思っていた。予言の技にあふれた口であると』。（アイスキュロスは、このようにアポロンを偽りの予言者としてとがめています。）『ところが、ほめ歌を歌ったその者、宴の席にいたその者、こう語ったその者こそが、わたしの子を殺した者なのだ』。

22:95 しかし、これらは、おそらく詩人たちの迷いなのでしょう。ただ、これについては、自然学による、次のような説明もあります。エンペドクレスはこう言っています。『輝くゼウス、いのちを育むヘラ、アイドネウス、そして、涙で人の泉をうるおすネスティス』。22:96 それでは、ゼウスが火であり、ヘラが地であり、アイドネウスが空気であり、ネスティスが水であるとします。そして、これらの火、水、空気が元素であるなら、そのどれも神ではありません。ゼウスも、ヘラも、アイドネウスも神ではないのです。これらの成り立ちと生まれは、神がお分けになった物質から来るからです。『火と水と地と、空気のやわらかな高み。そして、それらとともに愛』。22:97 これらは、愛がなければとどまることができず、争いによってかき乱されます。それなら、どうしてこれらが神々だと言えるでしょうか。エンペドクレスによれば、愛は支配するものであり、合成物は支配されるものです。そして、支配するものが主なのです。ですから、支配されるものと支配するものの力を、一つの同じ力とするとします。そうすれば、わたしたちは知らないうちに、朽ちて流れ去り、移り変わる物質を、神と同じ誉れのものにしてしまいます。神は、生じたのではなく、永遠で、いつもご自分と一致しておられるかたです。22:98 ストア派の人々によれば、ゼウスは煮えたぎる（ゼウサ）実体です。ヘラは空気（アエール）です。アエールという語を、それ自体と続けて発音すると、ヘラの名も一緒に聞こえます。ポセイドンは飲み物（ポシス）です。ほかの人々は、ほかのしかたで自然学による解釈をします。実際、ある人々は、ゼウスを、二つの性を持ち、男でも女でもある空気だと言います。またある人々は、時（クロノス）をほどよい気候へと変える季節だと言います。そのため、ゼウスだけがクロノスから逃れたというのです。しかし、ストア派の人々については、こう言うことができます。あなたがたは、最も高い神は一つで、生じたのではなく永遠だと考えているとします。また、合成物は物質の移り変わりの数だけあると考えているとします。そして、神の霊は物質の中に行き渡り、その変化に応じて次々に別の名を受けると言っているとします。それなら、物質の形相は神のからだとなるでしょう。そして、万物が燃え尽きるときに元素が滅びれば、名も形相とともに滅びるのが必然です。残るのは、神の霊だけです。22:99 では、物質に従って移り変わり、朽ちていくからだを、だれが神々だと信じるでしょうか。また、ある人々はこう言います。クロノス（クロノス）で、レアは地である。レアはクロノスによって身ごもって生む。そこから、レアは万物の母と考えられている。クロノスは生み、また食い尽くす。陰部を切り取ることとは、男が女と交わることである。その交わりは、精を断ち切って胎に投げ入れ、人間を生む。生まれた人間は、自分の中に欲望を持っており、それがアフロディテである。クロノスの狂気とは、季節の移り変わりで、命あるものも命のないものも滅ぼす。縛めとタルタロスとは、季節によって移り変わり、見えなくなる時のことである。それでは、このような人々に、わたしたちはこう言っています。クロノスが時であるなら、それは変わります。季節であるなら、移り変わります。闇か、霜か、湿った実体であるなら、そのどれもとどまりません。しかし、神的なものは、死ぬことがなく、動かず、変わりません。ですから、クロノスも、クロノスに当てられた偶像も、神ではありません。22:100 ゼウスについてはどうでしょうか。ゼウスが、クロノスから生じた空気で、その男の部分がゼウス、女の部分がヘラだとします。そのため、ヘラはゼウスの姉妹でもあり、妻でもあるというのです。それなら、ゼウスは変わります。季節であるなら、移り変わります。しかし、神的なものは、変わることも、移ろうこともありません。22:101 これ以上語って、あなたがたをわずらわせなければならないでしょうか。自然学で解釈した人々のそれぞれが何を説いたかは、あなたがたのほうがよく知っています。自然について書いた人々がどう考えたかも、よく知っています。アテナについて何を言っているかも知っています。彼らは、アテナを、すべてのものに行き渡る思慮だと言っています。イシスについても知っています。彼らは、イシスを永遠の本性と呼び、すべての者がそこから生まれ、それによってあると言っています。オシリスについても知っています。オシリスは兄弟テュフォンに殺され、イシスはともにその手足を捜して見つけ、葬り

のために整えました。その葬りは、今もオシリスの葬りと呼ばれています。22:102 実際、彼らは、物質の形相のまわりを上へ下へとさまよい、理性によって見られる神から離れ落ちてしまいます。そして、元素とその部分を神とし、そのときどきに別の名を付けます。麦の種まきはオシリスと呼びます。そこから、手足、あるいは実りが見つかったとき、奥義の中でイシスに向かってこう唱えられたと言います。『見つけた、ともに喜ぼう』。ぶどうの木の実はディオニュソスと呼び、ぶどうの木そのものはセメレと呼び、太陽の炎は雷と呼びます。22:103 しかし、物語を神々に仕立てる者たちは、神々について語るどころではありません。神々を弁護するために言うことで、かえって神々について言われていることを裏づけていると、気づいていないのです。エウロペと牡牛、白鳥とレダが、地や空気と何の関係があるのでしょうか。ゼウスと彼女たちとの汚らわしい交わりが、地と空気の交わりだというのでしょうか。22:104 しかし、彼らは神の偉大さから離れ落ちています。理性によって上をのぞき見ることもできずに、物質の形相のまわりで、やつれ果てています。上をのぞき見ることができないのは、天の場所への親しみを持たないからです。そして、地に落ちて、元素の移り変わりを神としています。それは、ちょうど、ある人が、自分の乗った船を、舵取りの代わりとみなすようなものです。22:105 しかし、船は、すべてが整えられていても、舵取りがいなければ何の役にも立ちません。それと同じように、元素も、整えられていても、神から出る摂理がなければ、何の役にも立ちません。船はひとりでに航海することはなく、元素も造り主なしには動かないからです。

23〜24章　偶像に働く者と、御使の堕落

23:106 すると、あなたがたは、賢さですべての人にまさっているので、こう言うかもしれません。「わたしたちが像を立てて祀っている者たちが神々でないなら、いくつかの偶像が働きを示すのは、どういうわけですか。命がなく動かない像が、動かす者もなしに、自分だけで力を持つとは考えられないからです」。たしかに、場所により、町により、民族により、偶像の名のもとに何らかの働きが起こることは、わたしたちも否定しません。しかし、ある人々が助けられ、別の人々が苦しめられたとしても、どちらの働きをした者も、神々として認めはしません。23:107 そればかりか、わたしたちは、あなたがたが偶像に力があると考えるわけを、詳しく調べてあります。偶像の名をかたって働いているのがだれなのかも、調べてあります。わたしは、偶像に働いているのがだれなのか、また、彼らが神々ではないことを示そうとしています。そのためには、哲学の側からも、何人かの証人を用いる必要があります。23:108 タレスの説を詳しく調べた人々が伝えるところでは、最初にタレスが、神、ダイモン、英雄を分けます。その上で、神とは世界の知性であるとし、ダイモンとは魂である実体と考え、英雄とは、からだから離れた人間の魂だとします。善い魂は善い英雄、悪い魂は悪い英雄です。23:109 一方、プラトンは、ほかのことでは判断を控えています。それでも、彼もまた、次のものを分けます。生じたのではない神と、その神によって天の飾りとして生じたさまよう星と動かない星と、そしてダイモンです。このダイモンについて、プラトンは自分で語ることを控え、それについて語った人々に耳を傾けるのがよいとしています。23:110 『ほかのダイモンについて語り、その生まれを知ることは、わたしたちの力に余る。むしろ、以前に語った人々を信じるべきである。彼らは、自分で言ったように神々の子孫であり、自分の祖先のことは、きっとはっきり知っていたからである。だから、神々の子たちを信じないことはできない。たとえ、もっともらしい証明も必然の証明もなしに語るとしてもである。かえって、身内のことを伝えると言っているのだから、慣わしに従って信じるべきである。そこで、彼らに従って、わたしたちにとっても、神々そのものの生まれはそのようであるとすればよい。そのように語られればよい』。23:111 『ゲーとウラノスの子として、オケアノスとテテュスが生まれた。この二人から、フォルコスとクロノスとレア、また彼らとともにいた者たちが生まれた。クロノスとレアからは、ゼウスとヘラが生まれた。また、彼らの兄弟と言われているとわたしたちの知る者たちが、みな生まれた。さらに、その子孫たちも生まれた』。23:112 では、プラトンは、永遠の知性と、理性によってとらえられる神とを思い描いた人です。また、神に備わるものを語り尽くしました。真にあるもの、ただ一つの本性を持つもの、神から流れ出る善、つまり真理です。さらに、第一の力について語りました。そして、『すべてのものは、すべてのものの王のまわりにある。すべてのものは、その王のためにある。それが、すべてのものの原因である』と語りました。また、二と三について、『第二のものは第二のもののまわりに、第三のものは第三のもののまわりにある』と語りました。その人が、感覚でとらえられる地と天から生じたと言われる者たちについて、真実を学ぶのは自分の力に余ると考えたでしょうか。決してそうは言えません。23:113 そうではなく、プラトンは、神々が子を生んだり、生み出されたりすることはありえないと考えました。生じるものには終わりが伴うからです。また、物語を吟味もせずに受け入れている大衆の考えを改めさせるのは、それよりもさらにありえないと考えました。そのゆえに、ほかのダイモンの生まれについて知り、語ることは自分の力に余る、と言ったのです。神々が生まれるということを、学ぶことも、言い表すこともできなかったからです。23:114 また、プラトンが語った次の言葉もあります。『天の偉大な導き手ゼウスは、翼のある戦車を駆り、すべてを整え、心を配りながら、先頭を進む。その後に、神々とダイモンの軍勢が従う』。これは、クロノスから生まれたと言われるゼウスのことではありません。この箇所では、ゼウスという名は、万物の造り主の名だからです。23:115 プラトン自身も、

それを示しています。彼は、造り主を呼ぶのに、ほかにふさわしい名を持ちませんでした。そこで、世間の名を用いたのです。それを神に固有の名としてではなく、わかりやすくするために用いました。神のことを、力のかぎり、すべての人に伝えることはできないからです。そして、『偉大な』という語を添えました。天のかたを地から出た者から、生じたのではないかたを生じた者から分けるためです。地から出た者は、天と地よりも後に生まれ、クレテ人よりも後に生まれました。クレテ人は、彼が父に殺されないように、ひそかに連れ去ったのです。

24:116 それにしても、あらゆる学説を究めたあなたがたに、詩人を引いたり、ほかの見解を調べたりしなければならないでしょうか。わたしは、これだけ言えば足りるのですから。もし、詩人も哲学者も、神は一つであると認めていなかったとします。そして、こうした神々を、ある人々はダイモン、ある人々は物質、ある人々はかつての人間と考えていなかったとします。それなら、神と物質と、その両方の実体とを区別して語るわたしたちが、追い出されても当然だったでしょう。24:117 実際、わたしたちは、神と、その子であるロゴスと、聖霊とがあると言っています。父と子と霊は、力において一つです。子は父の知性であり、ロゴスであり、知恵であって、霊は、火から出る光のように、流れ出たものだからです。それと同じように、わたしたちは、ほかの力もあると理解しています。それらは、物質のまわりで、また物質を通して治める力です。その一つは、神に敵対する力です。24:118 神に敵対すると言うのは、何かが神に張り合っているからではありません。エンペドクレスの説で、争いが愛に張り合うようなものでもありません。目に見える現れのうえで、夜が昼に張り合うようなものでもありません。もし何かが神に逆らって立ったなら、その成り立ちは神の力と強さによって解かれ、存在をやめたはずだからです。そうではなく、そう言うのは、物質にかかわる霊が、神の善に反しているからです。この善は、神に備わり、神とともにあります。色がからだとともにあるのと同じで、神はこの善なしにはおられません。善は神の部分としてあるのではありません。そうではなく、必ず神に伴うものとして、神と結び合い、溶け合ってあるのです。火が黄色く、天空が青いのと同じです。神がこの霊をお造りになったのは、ほかの御使たちをお造りになったのと同じです。そして、この霊は、物質と物質の形相の管理を任されていました。24:119 実際、御使たちの成り立ちとは、こういうことです。御使たちは、神のために、神が整えられたものに摂理を行うものとして生じたのです。それは、万物に対する完全で全般的な摂理は神がお持ちになり、部分の摂理は、それらの上に置かれた御使たちが持つためです。24:120 人間は、徳も悪も、自分で選んで持ちます。悪も徳もその人しだいでないなら、あなたがたは、善い者を重んじることも、悪い者を罰することもしないはずだからです。また、あなたがたから任されたことについて、熱心な者もいれば、不忠実な者もいるとわかります。御使たちの場合も、人間の場合と同じようになっているのです。24:121 実際、ほかの御使たちは、神がお造りになったとおり、自分で選ぶことのできる者でした。そして、神が彼らをそのためにお造りになり、お定めになった務めにとどまりました。しかし、ある者たちは、自分の実体のあり方も、任された支配も、辱めました。物質と、物質の中の形相とを治めるあの支配者と、ほかにも、この第一の大空のあたりにいる者たちの何人かです。あなたがたも知っているとおり、わたしたちは、証しのないことは何も語りません。預言者たちによって告げられたことを伝えているのです。大空のあたりの者たちは、乙女たちへの欲望に落ち、肉に負ける者となりました[1]。あの支配者は、任されたものの管理をおろそかにし、悪い者となりました。24:122 こうして、乙女たちに心を奪われた者たちから、巨人と呼ばれる者たちが生まれました。詩人たちにも、巨人について部分的に語った話があるとしても、驚かないでください。世の知恵と神についての知恵とは、真理がもっともらしさと違うほどに違うからです。神についての知恵は天のもので、世の知恵は地のものです。そして、物質の支配者が言うとおりです。『わたしたちは、真実に似た偽りを多く語るすべを知っている』。

訳注

1 創世記六・二の『神の子たち』を『神の御使たち』とするギリシア語訳がある。

25〜27章　悪霊の働きと、像の不思議

25:123 そこで、天から落ちたこれらの御使たちは、空気と地のあたりにいて、天の上の領域へ昇ってのぞくことは、もうできません。また、巨人たちの魂は、世界のあたりをさまよう悪霊です。そして、どちらも、それぞれに見合った動きを起こします。悪霊は、受けた成り立ちに見合った動きを、御使は、抱いた欲望に見合った動きを起こすのです。25:124 一方、物質の支配者は、起こる出来事そのものから見て取れるとおり、神の善に反する仕方で管理し、取り仕切っています。『わたしの胸を、しばしば思いがよぎった。人の世を定めるのは運なのか、ダイモンなのか。それは、望みにも正義にも反して、ある者を家から落ちぶれさせて暮らしの糧も失わせ、ある者を栄えさせる』。25:125 望みにも正義にも反して、人が幸せになったり、不幸になったりすること。それが、エウリピデスを言葉に詰まらせました。地上の物事をこのように取り仕切っているのがだれなのか、言えなくなったのです。こうした取り仕切りのもとでは、こう言う人もいるでしょう。『では、これを見ていながら、どうして、神々の一族がいると言えようか。どうして、掟に従っていられようか』。25:126 これはまた、アリストテレスにも、天より下のものには摂理が及ばないと言わせました。けれども、神の永遠の摂理は、わたしたちに等しくとどまっています。『大地は、望もうと望むまいと、否応なく草を生やし、わたしの家畜を肥やす』。また、部分の摂理は、人の思わくではなく真実に従って、ふさわしい者に及びます。そして、ほかのものは、共通の成り立ちに従い、理の法によって摂理を受けているのです。25:127 しかし、反対の霊から出る悪霊の動きと働きが、こうした乱れた衝動をもたらします。さらに、人間をも、一人一人違ったふうに動かします。一人ずつも、民族ごとにも、部分的にも、全体としても、内からも外からも動かすのです。それぞれが物質とどれほどかかわり、神的なものとどれほど通じ合っているかに応じてです。そのゆえに、名の知られた人々の中にも、こう考えた者たちがいます。この万物は何かの秩序によって成り立っているのではなく、理に合わない運によって引き回され、運ばれているのだ、と。彼らは、次のことを知らないのです。世界全体の成り立ちにかかわるものには、乱れたものも、なおざりにされたものも、何一つありません。そうではなく、そのどれもが理によって生じたのです。ですから、それらは自分に定められた秩序を踏み越えることもありません。一方、人間も、人間を造られたかたに関するかぎりでは、秩序のうちにあります。生まれによる本性は、一つの共通の理を保っています。形づくられたときに受けたからだのつくりは、それに定められた法を踏み越えません。生涯の終わりは、すべての人に等しく共通のままです。しかし、別の面もあります。自分に固有の理と、支配の座にある支配者とそれに従う悪霊たちの働きです。これらに関するかぎりでは、人はそれぞれ違ったふうに運ばれ、動かされます。すべての人が、自分の中に共通の推論の力を持っているのにです。

26:128 そして、人々を偶像のまわりに引き寄せているのは、先に述べた悪霊たちです。彼らは、犠牲の獣の血にへばりつき、その獣をなめ回しています。一方、大衆に好まれ、像にその名が付けられている神々は、彼らについての言い伝えからわかるとおり、人間でした。26:129 そして、名をかたっている者たちが悪霊であることは、彼らそれぞれの働きが証拠です。レアの名をかたる者たちは陰部を切り取り、アルテミスの名をかたる者たちは傷を負わせたり、切りつけたりするからです。そして、タウロイの地のアルテミスは、旅人を殺します。これ以上は挙げません。刃物や骨の鞭で自分の身を痛めつける者たちのことも、悪霊にどれほどの種類があるかも、言わずにおくからです。実際、自然に反することへ人を駆り立てるのは、神のすることではありません。『ダイモンが人に災いを備えるときには、まずその人の知性を損なう』。26:130 しかし、神は完全に善いかたであり、永遠に善を行われるかたです。そこで、働いている者たちと、像を立てられている者たちとが別であることには、何よりの証拠があります。トロアスとパリオンです。トロアスには、ネリュリノスの像があります。わたしたちの時代

の人です。パリオンには、アレクサンドロスとプロテウスの像があります。アレクサンドロスは、墓も像も、今なお広場にあります。たしかに、ネリュリノスのほかの立像は、町の公の飾りです。もし、そんなもので町が飾られるというのならですが。しかし、そのうちの一体は、託宣を告げ、病人を癒やすと考えられています。そうしたことのゆえに、トロアスの人々は、犠牲をささげ、その立像に金を塗り、冠をかぶせています。26:131 次に、アレクサンドロスの立像と、プロテウスの立像です。プロテウスがオリンピアの近くで火に身を投じたことは、あなたがたも知っているとおりです。このプロテウスの立像も、託宣を告げると言われています。アレクサンドロス〔『忌まわしいパリスよ、姿の最も美しい者、女狂いよ』〕[1]の立像には、公に犠牲がささげられています。祈りを聞く神に対するように、祭りも行われているのです。では、像のまわりでこうしたことを働いているのは、ネリュリノスやプロテウスやアレクサンドロスでしょうか。それとも、物質の成り立ちでしょうか。しかし、物質のほうは青銅です。いったい、青銅がそれ自体で何ができるでしょうか。青銅は、また別の形に作り変えることができます。ヘロドトスの伝えるアマシスが、足を洗う盥をそうしたようにです。26:132 一方、ネリュリノスやプロテウスやアレクサンドロスは、病人に何の役に立つでしょうか。像が今していると言われることを、像は、ネリュリノスが生きていて病んでいたときにもしていたからです。

27:133 では、どういうことでしょうか。まず、思い込みをめぐって起こる、魂の理に合わない、幻のような動きがあります。それは、時に応じてさまざまな像を、あるものは物質から引き出し、あるものは自分で形づくり、はらみます。魂がこうなるのは、とりわけ、物質的な霊を取り込み、それと混ざり合ったときです。そのとき魂は、天のものとその造り主ではなく、下の地上のもの、それもすっかり地のほうを見ています。もはや清い霊ではなく、ただ血と肉のようになっているのです。ですから、魂のこうした理に合わない、幻のような動きが、偶像に狂う幻を生み出すのです。27:134 柔らかく、導かれやすい魂があります。その魂は、力強い教えを聞いたことも、知ったこともありません。真理を見たこともなく、万物の父であり造り主であるかたを思いめぐらしたこともないのです。そのような魂が、自分について偽りの考えを自分の中に刻み込むときがあります。そのとき、物質のまわりにいる悪霊たちが動きます。彼らは、犠牲の煙と犠牲の獣の血をむさぼり、人間を欺く者たちです。彼らは、大衆の魂の、偽りの考えに傾くこうした動きを取り込みます。そして、人々の思いに入り込んで、偶像や像から来るかのような幻を、彼らの中に流れ込ませるのです。また、魂は不死のものなので、自分の力で、理にかなって動くことがあります。来たるべきことを予告したり、今起きていることを癒やしたりするのです。そうしたことの誉れも、悪霊たちが自分のものにするのです。

訳注

1 この一行は、後の読者の書き込みが本文に入ったものとする説がある。

28〜31章　神々は人間だったこと、もう二つの訴え

28:135 また、先に述べたことに沿って、神々の名についても少し述べる必要があるでしょう。さて、ヘロドトスと、フィリッポスの子アレクサンドロスは、神々が人間だったことを、祭司たちから学んだと言っています。アレクサンドロスは、母に宛てた手紙の中でそう言うのです[1]。二人とも、ヘリオポリスとメンピスとテーバイで、祭司たちと語り合ったと言われています。28:136 ヘロドトスはこう言います。『こうして、彼らは、像の主である者たち自身が、そのような者であって、神々からははるかに隔たっていたことを示した。だが、この人々より前には、エジプトを治めていたのは神々で、人間と共にはいなかった。そして、その中のつねに一人が支配していた。後に、オシリスの子ホルスがそこの王となった。ギリシャ人がアポロンと呼ぶ者である。ホルスはテュフォンを退けて、エジプトの最後の王となった。オシリスは、ギリシア語ではディオニュソスである』。28:137 つまり、ほかの王たちも、エジプトの最後の王も、人間だったのです。そして、神々の名は、この人々からギリシャ人に伝わりました。アポロンは、ディオニュソスとイシスの子です。同じヘロドトスがこう言うとおりです。『彼らは、アポロンとアルテミスはディオニュソスとイシスの子であり、レトは二人の乳母であり、救い手であったと言う』。エジプト人は、この者たちを、天から出た者として、最初の王に持ちました。そして、彼らを妻たちと共に神々として認めました。一つには、神的なものへの真の敬虔を知らないゆえに、一つには、その支配に恩を感じたからです。28:138 『さて、エジプト人はみな、清い雄牛と雄の子牛を犠牲にささげるが、雌牛を犠牲にささげることは許されていない。そうではなく、雌牛はイシスに聖なるものである。イシスの像は女の姿で、牛の角を持っている。ギリシャ人がイオを描くのと同じである』。28:139 では、こうしたことを語って、家系を継ぐ者たちより信じられる者がいるでしょうか。彼らは代々、子が父から、祭司職と共に言い伝えも受け継いでいるのです。偶像をあがめさせている神殿の番人たちが、偶像の神々は人間だったと偽りを言うはずはないからです。28:140 たしかに、もしヘロドトス一人が、エジプト人は神々について人間のことのように語っている、と言ったのだとします。しかも、ヘロドトスはこうも言っています。『さて、わたしが聞いた語りのうち、神々にかかわることは、述べるつもりはない。ただ、その名だけは別で、それもごくわずかである』。それならば、作り話をする者として、ヘロドトスを信じないでおかなければならなかったでしょう。28:141 しかし、実際には、アレクサンドロスも、トリスメギストスと呼ばれるヘルメスも、この王たちに永遠の血筋を結びつけていました。ほかにも数えきれない人々がそうしていますが、一つ一つは挙げません。そうであるからには、王であった彼らが神々とみなされなかったと言う理由は、もう残っていません。また、彼らが人間だったことは、エジプト人の中で最も学のある人々も明らかにしています。彼らは、天空と地と太陽と月を神々と呼びながら、ほかの者たちは死すべき人間とみなし、神殿をその墓とみなしているからです。アポロドロスも、『神々について』の中で、このことを明らかにしています。28:142 また、ヘロドトスは、彼らの受難を秘儀だとも言っています。『ブシリスの町で、人々がどのようにイシスの祭りを行うかは、先に述べた。実際、犠牲の後、男も女もみな、何万という大勢の人々が、身を打って嘆くのである。だが、どのように打つのかを言うことは、わたしには許されていない』。神々であるなら、不死でもあるはずです。しかし、人々が身を打って嘆き、その受難が秘儀であるなら、彼らは人間です。ヘロドトス自身も、こう言うとおりです。28:143 『また、このようなことに関してその名を口にするのを、わたしがはばかる者の墓も、サイスにある。アテナの神域の中の、神殿の裏手で、アテナの神殿の壁一面に沿っている。また、そのそばに湖があり、まわりを石の縁で飾られている。大きさは、わたしの見るところ、デロスの、車輪の形と呼ばれる湖ほどである。この湖で夜に行われる、その者の受難をまねる業を、エジプト人は秘儀と呼ぶ』。28:144 また、オシリスの墓が示されるだけでなく、そのミイラ作りまで示

されます。『遺体が運び込まれると、彼らは、運んできた者たちに、木で作り、色を塗って本物に似せた遺体の見本を見せる。そして、そのうちで最も手の込んだものは、このようなことに関してその名を口にするのを、わたしがはばかる者のものだと言う』。

29:145 さらに、ギリシャ人の中で詩と歴史に通じた賢者たちも、同じことを語っています。ヘラクレスについてはこうです。『むごい男だ。神々の罰も、自分が客のために整えた食卓もはばからなかった。そして、その客をも殺したのだ』。そのような者だったのですから、彼が狂気に陥ったのも当然であり、薪の山に火をつけて自分を焼いたのも当然です。29:146 また、アスクレピオスについては、ヘシオドスがこう言います。『人間と神々の父は怒った。そして、オリュンポスから煙る雷を投げつけ、心を激して、いとしいレトの子[2]を殺した』。ピンダロスはこう言います。『だが、知恵さえも利得に縛られる。手の中に輝く黄金が、豪勢な報酬で、あの者をも惑わした。そこで、クロノスの子は、手で投げつけ、二人の胸から、たちまち息を奪った。燃える雷が、死を打ち込んだのだ』。29:147 そこで、二つに一つです。彼らが神々だったのなら、彼ら自身は黄金に心を寄せなかったはずです。人は黄金をこう歌います。『おお黄金よ、死すべき者が受ける最も美しい贈り物よ。母も、子らも、これほどの喜びは持たない』。それでも心を寄せないのは、神的なものが、何も必要とせず、欲望にまさるからです。また、死ぬこともなかったはずです。そうでなければ、彼らは人間であって、無知のゆえに悪く、金銭に負ける者だったのです。29:148 カストルやポリュデウケスやアンフィアラオスの名を挙げて、多くを語らなければならないでしょうか。彼らは、言ってみれば昨日今日、人間から生まれた人間なのに、神々とみなされています。人々は、イノでさえ、狂気と、狂気の中で受けた苦しみの後に、女神になったと考えているのですから。『海をさすらう者たちは、彼女をレウコテアの名で呼ぶ』。その子も、神になったと考えています。『おごそかなパライモンと、船乗りたちに呼ばれよう』。

30:149 実際、唾棄すべき、神に憎まれた者たちでさえ、神々であるという評判を得ました。デルケトの娘セミラミスは、好色で、血に汚れた女でしたが、シリヤの女神とみなされました。そして、シリヤ人は、デルケトのゆえに、鳩とセミラミスを敬っています。鳩を敬うのは、なんとありえないことに、この女が鳩に変わったというからです。この話はクテシアスにあります。そうであるなら、ある者たちが、支配と独裁のゆえに、同時代の人々から神々と呼ばれたとしても、何の不思議があるでしょうか。シビュラは、こう言います（プラトンも、シビュラに触れています）。30:150 『そして、そのとき、死すべき人間の第十の世代が来た。洪水が先の人々を襲って以来の世代である。そして、クロノスとティタンとイアペトスが王となった。人間たちは、彼らをガイアとウラノスの最もすぐれた子らと呼び、ガイアとウラノスという名を付けた。彼らが死すべき人間の最初の者たちだったからである』。また、ヘラクレスやペルセウスのような者たちは力のゆえに、アスクレピオスのような者たちは技のゆえに、神々と呼ばれました。これにも、何の不思議があるでしょうか。30:151 つまり、治められる者たち自身か、治める者たち自身が、ある人々に栄誉を分け与えました。その人々のうち、ある者は恐れから、ある者は敬いから、神という名にあずかったのです。アンティノウスも、あなたがたの先祖の、臣民に対する慈しみによって、神とみなされるに至りました。そして、後の人々は、確かめもせずに受け入れたのです。30:152 『クレテ人は、いつもうそつき。実際、王よ、クレテ人はあなたの墓を造った。だが、あなたは死ななかった』。カリマコスよ、あなたはゼウスの誕生を信じながら、その墓を信じません。そして、真理を覆い隠すつもりで、知らない人々にまで、死んだ者を告げ知らせています。あなたは、洞穴を見れば、レアの出産を思い起こし、棺を見れば、死んだ者に闇をかぶせるのです。生じたのではない神だけが永遠であられることを、あなたは知らないのです。実際、どちらかです。大衆や詩人たちが語る神々の神話が信じるに足りず、神々への敬虔もむだなのか。語りが偽りであれば、語られている者たちは存在しないからです。それとも、生まれも、恋も、殺しも、盗みも、去勢も、雷も本当なのか。それなら、彼らはもう存在しません。存在しなかったのに生じたのですから、存在することをやめたのです。30:153 実際、ある話は信じ、ある話は信じないという、どんな理由があるでしょうか。詩人たちは、神々をよりおごそかに見せようとして、彼らのことを語ったのにです。彼らが神々とみなされたのは、この詩人たちのゆえです。詩人たちは、彼らについての言い伝えをおごそかに飾りました。そ

の詩人たちが、彼らの受難について偽りを言ったはずはないからです。つまり、わたしたちが無神論者でないことは、ふさわしいほどではないにしても、わたしの力の及ぶかぎり、証明されました。わたしたちは、この万物の造り主と、そのかたから出たロゴスとを、神として認めているからです。

31:154 さらに、彼らは、わたしたちに対して、神をないがしろにする食事と交わりの話をでっち上げています。自分たちが理由があって憎んでいるのだと思えるようにするためです。また、脅すことで、わたしたちを生き方の決意から引き離せると思っているからです。あるいは、罪状のひどさによって、支配者たちを厳しく容赦のない者にできると思っているからです。しかし、彼らが戯れている相手は、知っている人々です。悪徳が徳に戦いを挑むことは、何か神的な法と理によって、わたしたちの時代だけでなく、昔からならいとなってきたのです。31:155 そのように、ピュタゴラスは、ほかの三百人と共に火で焼かれました。ヘラクレイトスとデモクリトスも追われました。一人はエペソの人々の町から、もう一人は、気が狂っていると訴えられて、アブデラの人々の町からです。また、アテネの人々は、ソクラテスに死刑を言い渡しました。しかし、彼らは、大衆の思わくのゆえに、徳において少しも劣ることはありませんでした。それと同じように、ある人々の分別のないそしりも、わたしたちの生き方の正しさを少しも曇らせません。わたしたちは、神のもとで良い評判を得ているからです。31:156 それでも、これらの罪状にも答えましょう。たしかに、あなたがたに対しては、これまで述べたことによっても、わたしは弁明を果たしたと、よく知っています。あなたがたは、賢さですべての人にまさっており、次のことを知っているからです。神を物差しとして生き方を整えている者たちがいます。わたしたち一人一人が、神の前で責められるところも、非難されるところもない人間になるためです。その者たちは、ごく小さな罪さえ、決して思いに浮かべることはありません。31:157 実際、もしわたしたちが、この世の生涯だけを生きると信じているのなら、こう疑うこともできたでしょう。わたしたちが肉と血に仕え、利得か欲望に負けて、罪を犯すのではないか、と。しかし、わたしたちは知っています。神は、わたしたちが思うことにも、語ることにも、夜も昼も臨んでおられます。また、神はまったき光であって、わたしたちの心の中にあることまでも見ておられます。そうである以上、わたしたちは信じています。この世の生涯から解き放たれた後、別の生涯を生きるのだと。その生涯は、二つに一つです。一つは、この世の生涯よりもすぐれた、地上のものではない天上の生涯です。そのとき、わたしたちは、神のもとに、神と共にとどまり、魂において揺らぐことも、苦しみを受けることもないからです。たとえ肉を持っていても、肉としてではなく、天の霊としてとどまるのです。もう一つは、ほかの者たちと共に落ちて生きる、もっと悪い、火を通る生涯です。神は、わたしたちを、羊や荷を負う獣のように、片手間に、滅びて消え去るために造られたのではないからです。こうしたことを知っていながら、わたしたちが好んで悪を行うはずはありません。罰を受けるために、自分を大いなる審判者に引き渡すはずもありません。

訳注

1 アレクサンドロスの名で伝わるこの手紙は、後代の偽作とされる。

2 『レトの子』はふつうアポロンを指す。『アポロンの愛し子』と直す説がある。

32〜37章　交わりと人食いの訴えへの答え、結びの願い

32:158 たしかに、彼らが、自分たちの神々について語っていることを、わたしたちについて作り話にしても、少しも不思議ではありません。彼らは、神々の受難を秘儀にさえしているのです。しかし、彼らが、はばかることなく見境なく交わることを、恐ろしいことだと判断するつもりだったとします。それなら、ゼウスを憎むべきだったでしょう。ゼウスは、母レアからも娘コレからも子をもうけ、自分の姉妹を妻にしていたのです。あるいは、こうした話の作り手オルフェウスを憎むべきだったでしょう。オルフェウスは、ゼウスを、テュエステスにもまさって神聖を汚す、汚れた者にしたからです。実際、このテュエステスも、王になろうとし、また仇を討ってもらおうとして、託宣に従って自分の娘と交わったのです。32:159 しかし、わたしたちは、見境なく交わる者とはほど遠く、情欲をいだいて見ることさえ許されていません。主が、『情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである』と言われるからです（マタイ五・二八）。神が目をお造りになったのは、目がわたしたちの光となるためです。では、その目的のほかには何も見ることが許されず、楽しんで見ることが姦淫とされる者たちがいるとします。目は、ほかのことのために造られたからです。しかも、この者たちは、思いに至るまで裁かれることになっています。そのような者たちが慎みを保っていることを、どうして疑うことができるでしょうか。わたしたちが向き合っているのは、人間の法律ではないからです。人間の法律なら、悪い者になっても、その目を逃れることもできるでしょう。主君たちよ、わたしたちの教えが、神の教えられたものであることを、わたしは初めにあなたがたに示しました。わたしたちには、人間の法律ではなく、掟があるのです。その掟は、わたしたち自身にも隣人にも、正しさの規範を保たせるものです。32:160 そのため、わたしたちは、年齢に応じて、ある人々を息子や娘とみなし、ある人々を兄弟や姉妹としています。また、年長の人々には、父や母に対する敬いを払っています。そこで、わたしたちは、兄弟や姉妹、そのほかの身内の呼び名でみなしている人々について、大いに心を配っています。そのからだが辱められず、汚されないままでいるようにです。ロゴスが、わたしたちに、またこう言われるからです。『もしだれかが、心地よかったという理由で、口づけを繰り返すなら（罪を犯すことになる）』。そして、こう続けておられます。『だから、口づけは、いや、むしろあいさつは、細心の注意を払ってしなければならない』[1]。口づけが思いの中で少しでも濁れば、ロゴスは、わたしたちを永遠のいのちの外に置かれるのです。

33:161 ですから、わたしたちは、永遠のいのちの望みを持っているので、この世の生涯にあるものを軽んじます。魂の楽しみさえも軽んじるのです。わたしたち一人一人は、わたしたちの定めた規則に従ってめとった女を、妻とみなしています。それも、子をもうけるためだけです。農夫が地に種をまくと、さらにまき足すことはせずに、刈り入れを待ちます。それと同じように、わたしたちにとっても、子をもうけることが欲望の限度だからです。その一方で、わたしたちのもとでは、結婚せずに年老いていく人々も、多く見いだせるでしょう。男も女も、神といっそう近く共にいることを望んでいるのです。33:162 処女のまま、また独り身のままでいることは、人をいっそう神のそばに立たせます。そして、思いや欲望に至ることさえ、神から引き離すとします。それなら、わたしたちは、思いさえ避けている事柄の行いを、なおさら退けます。わたしたちのあり方は、言葉の稽古ではなく、行いを示し、行いを教えることにあるからです。それは、生まれたままでとどまるか、ただ一度の結婚にとどまることです。二度目の結婚は、体裁のよい姦淫だからです。実際、主は、『自分の妻を出して他の女をめとる者は、姦淫を行うのである』と言われます（マタイ一九・九）。主は、男が自分で処女を終わらせた女を出すことも、さらに妻をめとることも、お許しにならないのです。前の妻から自分を引き離す者は、たとえ妻が死んでいても、覆い隠された姦淫者だからです。その人は、神の御手のわざに背いています。初めに、神は

一人の男と一人の女をお造りになったからです。また、その人は、種族をつなぐために、一つとなるように結ばれた肉と肉との交わりを、解いているのです。

34:163 しかし、わたしたちはこのような者なのに、『遊女が貞淑な女をとがめる』ということわざのとおりのことを、言われています。ああ、口にすべきでない事柄を、どう語ればよいのでしょうか。実際、ある人々は、淫行の市を立て、若者たちのために、あらゆる恥ずべき快楽の不法な宿を設けています。男さえ容赦せず、男が男に対して恐ろしいことを行っています（ローマ一・二七）。からだが気高く美しい者ほど、あらゆる仕方で辱めているのです。神が造られた美しさまでも、おとしめています。美しさは、地上でひとりでに生じたものではなく、神が御手とみこころによって送られたものだからです。この人々こそが、わたしたちをののしっているのです。それも、自分たちでしていると知っていること、自分たちの神々についても語っていることで、ののしっています。彼らは、それを、立派なこと、神々にふさわしいこととして誇っているのです。姦淫する者や少年を愛する者たちが、独り身を守る者や一度だけ結婚した者をそしっています。魚のように生きている者たちがです。実際、魚は、出くわしたものを飲み込み、強いものが弱いものを追い立てます。34:164 そして、人の肉に手をつけるとは、このことです。法律が定められています。あなたがたとあなたがたの先祖が、あらゆる正しさに照らして調べ、定めた法律です。その法律そのものに反して、暴力をふるうことです。そのため、あなたがたが遣わす諸州の総督たちも、訴訟を裁ききれないほどです。訴えられているのは、わたしたちです。わたしたちには、打たれても身を差し出さないこと、悪く言われても祝福しないことは、許されていません。正しい者であるだけでは足りないからです。同じものに同じもので報いるのが、正しさです。わたしたちには、正しい者であるだけではなく、善良で、悪を忍ぶ者であることが求められているのです。

35:165 では、正気の人ならだれが、このようなわたしたちを人殺しだと言うでしょうか。先に人を殺さなければ、人の肉を味わうことはできないからです。つまり、彼らは一つ目（人殺し）について偽りを言っています。そして、二つ目（人食い）については、言っていることを見たのかと、だれかが彼らに尋ねたとします。見たと言うほど恥知らずな者は、一人もいません。しかも、わたしたちにも奴隷がいます。ある者には多く、ある者には少なくです。その目を逃れることはできません。それでも、彼らのうちのだれ一人、わたしたちについて、これほどのことを偽って言いさえしませんでした。実際、わたしたちは、たとえ正当に殺される者であっても、それを見ることさえ耐えられない人々だと知られています。そのような人々を、だれが人殺しや人食いで訴えるでしょうか。35:166 武器による戦いや獣との戦いを、とくにあなたがたの催すものを、熱心に求めるものに数えない者がいるでしょうか。しかし、わたしたちは、殺される人を見ることは殺すことに近いと考えて、そのような見世物を断ってきました。それなら、自分に呪いとけがれを負わないように、見ることさえしないわたしたちが、どうして人を殺すことができるでしょうか。35:167 また、わたしたちは、堕胎の薬を使う女たちは人を殺している、と言っています。その堕胎について、神に申し開きをすることになる、とも言っています。そのわたしたちが、どんな理屈で人を殺すのでしょうか。胎内にあるものも生き物であり、それゆえ神が心にかけておられると考えます。それでいて、生まれ出た者を殺すのは、同じ人のすることではないからです。また、捨てる者は子殺しをしているとして、生まれた子を捨てません。それでいて、育てた子を殺すのも、同じ人のすることではありません。そうではなく、わたしたちは、どんなことでも、どこでも、変わらず一貫しています。理性に仕え、理性を支配することはしないのです。

36:168 では、復活を信じている者のだれが、よみがえるはずのからだの墓として、自分を差し出すでしょうか。わたしたちのからだがよみがえると信じます。それでいて、よみがえらないもののようにそれを食べるのは、同じ人々のすることではないからです。また、地はその死者たちを返すと考えます。それでいて、自分の中に葬った死者については、返すように求められないと考えるのも、同じ人々のすることではありません。36:169 むしろ、反対に、こう考えるのが当然です。この世での悪い生涯にも良い生涯にも申し開きをすることはなく、復活もないと思っている者たちがいます。彼らは、魂もからだと共に滅び、いわば消えてしまうと考えています。そのような者たちなら、どんな大それたことも控えないでしょう。しかし、神のもとでは何一つ調べられずに済むことはない、と信じている者たちがいます。魂の理に合わない衝動や欲望に仕えたからだも、共に罰せ

られると信じているのです。そのような者たちには、ごく小さな罪でも犯す理由はありません。36:170 また、ある人には、大変なたわごとに思えるかもしれません。腐り、ばらばらになり、消え失せたからだが、ふたたび成り立つというのです。それでも、信じない人々のゆえに、わたしたちが受けて当然なのは、悪徳という評判ではなく、お人よしという評判でしょう。わたしたちが自分を欺いているとしても、その言葉によって、だれにも不義を行ってはいないからです。36:171 もっとも、からだがよみがえるのは、わたしたちの説でだけではありません。多くの哲学者の説でもそうです。しかし、それをいま示すのは余計なことです。目の前の論とかかわりのない論を、持ち込んでいると思われないためです。たとえば、知性で知られるものと感覚で知られるもの、またその成り立ちについて語ることです。あるいは、非物体的なものは物体よりも古く、知性で知られるものは感覚で知られるものに先立つ、と語ることです。わたしたちが最初に出会うのは、感覚で知られるものであるとしてもです。非物体的なものから、知性で知られるものが積み重なって、物体が成り立つからです。また、知性で知られるものから、感覚で知られるものが成り立つのです。実際、ピュタゴラスとプラトンの説では、妨げるものは何もありません。からだが解体した後、初めにそれが成り立ったのと同じものから、ふたたび成り立つことをです。しかし、復活についての論は、ここでは脇に置いておけばよいのです。

37:172 さて、あなたがたは、生まれつきにおいても教養においても、あらゆる点で善良です。節度があり、人を愛し、統治にふさわしい人々です。わたしは、罪状を晴らし、わたしたちが神を敬い、寛容で、魂を律した者であることを示しました。そのわたしに、どうか、皇帝の頭を傾けてうなずいてください。37:173 実際、願うものを得るのに、わたしたちよりふさわしい者がいるでしょうか。わたしたちは、あなたがたの支配のために祈っているのです。あなたがたが、子として父から、最も正しい順に従って統治を受け継いでいくように。また、すべての者が服従して、あなたがたの支配も増し加わり、広がっていくようにと。そして、これはわたしたちのためにもなることです。わたしたちが、安らかで静かな一生を過ごすためです（第一テモテ二・二）。また、自分たちも、命じられたことをすべて、進んで果たすためです。

訳注

1 この二つの言葉は今の聖書になく、出どころは分かっていない。

キリスト者のための弁明

2026年11月23日版
著者　アテナゴラス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/athenagoras-plea/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/athenagoras-plea
全文を、ギリシア語原文（Πρεσβειά περὶ Χριστιανῶν）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC BY-SA 4.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。